

まにわの子



真庭市キャラクター
まにぞう・まにぞうファミリー

令和8年4月3日第1号

真庭市教育委員会学校教育課

年度初め真庭市教育委員会教育長よりパート①

「あそび(余白と工夫の余地)」が土壌を耕し、「対話」が未来を創る

1. はじめに:立ち止まって、問い直す

いま私たちの社会は、かつてないほど効率化と合理化が進み、物質的な豊かさを享受できるようになりました。しかし、それと同時に、どこか大切なものが手のひらからこぼれ落ちてはいないか?その問いかけを避けて通ることは、もはやできません。

技術が進歩し、支援が増え、生活が便利になるほど、子どもは幸せになっているでしょうか。

人生100年時代といわれる中で、大人は、自分自身の存在が肯定され、自分らしく輝いて生きていると胸を張って言えるでしょうか。こうした根源的な問いこそが、真庭市教育委員会が歩み続けてきた実践の出発点でした。私たちは、便利さや効率性を追い求めるあまり、いつの間にか見失いかけていた「生きる手応え」を取り戻すことを目指してきました。そして、この価値こそが、真庭の子どもたち、そして大人たちの未来を支える土台になると確信しています。

2. すでに始まっている変化

この問いに向き合いながら、私たちは市民と共に、長い時間をかけて「持続可能な教育生態系」を育んできました。その中心にあるのは、「対話」と「自治」を積み上げる実践です。これは、学校教育の枠内に留まらない、市民全体による文化運動であり、まちの価値観そのものを変えていく営みです。

大人が「指導する側」であることを一度手放し、子どもと同じ地面に立ち、泥だらけになって遊び、火を囲みながら語り合う姿が生まれています。

「家庭教育支援チーム」では、子どもの育ちの応援にとどまらず、不登校や孤立に悩む親子に寄り添い、安心して過ごせる居場所が育っています。

学校では、学校運営協議会と地域学校協働活動が両輪となって、地域住民と学校関係者が真正面から膝を突き合わせ、学校の未来を共に考えています。

図書館には、地域の知恵・経験・想いが持ち寄られ、子どもから高齢者までがつながる「市民の共有地」としての役割が確立しつつあります。

これらは単なる取り組みの羅列ではありません。

市民が「手間を楽しむ」ことを前提とした文化が、確実に芽吹き、広がってきているのです。

私たちは確信しました。

大人が本気で楽しみ、子どもたちと共に育つ姿こそが、何よりの教育的価値であり、この地域を元気にするもっとも強いエネルギーであると。

危機を嘆く段階は、もう過ぎ去りました。

真庭のあちこちで生まれている「おもしろさ」と「主体性」は、新しい社会を形づくる確かな兆しであり、希望そのものです。



まなぼうにこにこ わになってのびのび育つ まにわの子

